

# 体験の観点からみる“挨 V”受身文の意味機能

李 菲\*

## 要旨

「～を受ける」ことを表す動詞“挨”は“挨打”“挨骂”のように、直後に動詞を伴うことができ、「殴られる」「叱られる」といった受身的な意味を表す。通常の“被”受身文に対し、“挨 V”の文は未然形が成立しやすく、かつ結果補語によって対象側の状態変化に言及できないため、両構文は異なる意味機能をもつことが分かる。“被”受身文は対象の状態変化に関心を寄せているのに対し、“挨 V”構文は主語に立つ人間がどんな事態に遭遇したのか（何をされたか）に焦点を置く。“挨 V”が表す体験には、“挨打”“挨骂”のようにイディオム化し、「体罰」や「叱責」といった行為タイプを表すものと、新しく作り出された非慣習的な表現が含まれる。いずれの場合、“挨 V”を成立させるためには「負の影響」が含意される必要がある。“挨 V”の意味、統語上の特徴は二つの拡張形式である“挨 NV”と“挨 N 的 V”にも受け継がれている。

キーワード：挨 V “被”受身文 体験 イディオム

## 1. はじめに

日本語の「殴られる」や「叱られる」は未然の事態を表す場合、“被”を用いた受身文に翻訳しづらい。

---

\* LI Fei 慶應義塾大学非常勤講師

(1) a のび太はよく殴られる。

? 野比总被打。

b のび太はお母さんに叱られるだろう。

? 野比会被妈妈骂。

この現象はすでに木村 1992:11 において指摘されている。木村氏は結果補語を伴わずに“被”受身文を作る動詞“打”(殴る)、“骂”(叱る)を「影響含意型」の動詞とよび、「影響含意型の動詞による BEI 受身文の成立が一般に既然の事態に限られている」という。この現象は、“被”受身文が対象の状態変化に焦点を置く表現であることの一つの現れでもある。従って中国語では「よく殴られる」や「また叱られそうだ」ということを伝えるのに、“被”受身文は用いられにくい。受身文の代わりとなるのは、本稿で取り上げる動詞“挨”を用いた構文である。

(2) a 野比总挨打。

b 野比会挨妈妈骂。

動詞“挨”は「～を受ける、～に遭う」という意味で、“挨打”、“挨妈妈骂”は直訳すると「殴りを受ける」「お母さんの叱りを受ける」であるが、実質的には日本語の「殴られる」「お母さんに叱られる」に対応する。動詞“挨”は“挨打”、“挨妈妈骂”のように、動詞や動詞句を目的語にとることで受け身の意味を表すことができる。“挨”構文は未然の事態に言及できる点で“被”受身文と大きく異なるが、次のように既然の事態を言い表す場合もあり、“被”受身文との言い換えが可能となる。

(3) のび太は殴られた。

a 野比挨打了。 b 野比被打了。

しかし、両者がともに成り立つのは結果補語が現れない場合のみである。“挨”構文は結果補語を伴えないため、“被”受身文と違って、逆に対象の状態変化を言い表すことができない<sup>1)</sup>。

(4) a \*野比挨打哭了。 ⇔ b 野比被打哭了。

“挨”構文が対象の状態変化を語るための表現でないことは、未然態の成立及び“\*挨打哭了”の不成立から十分に見て取ることができる<sup>2)</sup>。ここで、“被”受身文に対して、このような“挨”構文は一体どこに関心を寄せる表現なのか、ということが問題となる。(3)において両者は言い換えられるものの、“被打了”が対象の状態変化を言い表しているのなら、それとは異なる“挨打了”は一体どこに焦点を置き、何を語っているのだろうか。

もう一つの問題は、“挨”構文が表す受身の事態の範囲に関するものである。“被”受身文に比べ、“挨”構文に現れる動詞はかなり限られている。「殴られる」、「叱られる」は“挨”構文によって表現できるのに対し、「押される」は通常“?挨推”のように言うことができない。

(5) ?我挨推了。(私は押された。)

なぜ“挨打”、“挨骂”が成立し、“?挨推”は成立しないのか。結合する動詞によって表現の許容性が異なるのはなぜか。本稿の後半ではこうした問題点にも注目しながら、“被”受身文と異なる“挨”による受身表現の意味と機能を明らかにしたい。

## 2. 動詞“挨”とその構文

“挨”のように、「～を受ける、～に遭う」といった受身的な意味をもつ動詞は従来“遭受类动词”（遭受動詞）とよばれ、遭受動詞からなる構文は“遭受句”（遭受文）とよばれている。王一平 1994:28-33 は遭受動詞の目的語となる語を品詞別に分類し、“被”受動文との置き換えが可能か否かの観点から、遭受文がもつ意味特徴について考察している。動詞“挨”は名詞、形容詞、動詞を目的語にとることができ、王一平 1994:29 では次のように記述している。

(6) 挨: 遭受、忍受

①+名詞：鞭子、棒子、耳光、巴掌、子弹 など

②+形容詞<sup>3)</sup>：饿、冻

③+動詞：打、揍、掐、骂、批评、训斥、斗 など

まず、(6)をもとに動詞“挨”がもつ語彙の意味について見ておく。①の“挨鞭子”が表すのは要するに「鞭で打たれる」ことであるが、「打つ」に当たる動詞がどこにも現れていない。王一平1994では触れていないが、“挨”は目的語を伴わない場合、しばしば動詞“打”（打つ）に対し、「打たれる」の意味で用いられる。

(7) 周瑜打黄盖——一个愿打，一个愿挨。(周瑜が黄蓋を打つ——一人は打ちたい、もう一人は打たれたい。)

(7)における“打”と“挨”の関係は、日本語の「あげる-もらう」の関係と類似している。モノの授与という行為を与える側から述べると「あげる」となり、受けとる側に立つと「もらう」となる。授与行為におけるこの対立を“打”と“挨”のペアに当てはめると、“挨”は「もらう」と同様、行為を受けとる方に立脚しており、「(攻撃行為を) 食らう」ことを表す。従って“挨”が表す“遭受、忍受”には単なる「何らかの遭遇」や「我慢」の意味よりも、「(他者からの動作行為を) 受ける、食らう、被る」といった受身の意味が含まれている<sup>4)</sup>。“挨”のこうした意味は、動詞を目的語にとる“挨V”表現(③)にも受け継がれている。“挨打”、“挨骂”は直訳すれば、「“打”“骂”の動作行為を食らう」という意味である。“挨N”はすべて身体攻撃の事態を表しているのに対し、“挨V”はそれ以外の被害にも対応できるようになっている。

“挨N”と“挨V”は「他者による動作行為を食らう」という事態を表すのに対し、形容詞(A)が目的語となる“挨A”(②)は「他者や外的要因によって、Aの状態に陥る」ことを表す。従来の記述では、“挨A”は「人間が寒さや空腹などの苦しい状態に耐える」という意味で解釈されることが多いが、“挨”は単に「辛抱する、こらえる」を表しているわけでは

ない。

(8) 挨了饿的小狗含恨地睨视着我们。(CCL) (空腹に耐えた子犬は  
憎しみを込めた目つきでわれわれを睨んだ。)

ここでの“挨”は“忍”（辛抱する）の意味とは異なる。“\* 忍饿”が成立しないのに加え、一般的に“忍”を使う場面で“挨”を使うことはできない。例えば、注射のとき、看護師が患者に“您忍一下啊”（ちょっと我慢してね）とはいえるが、“?您挨一下啊”はおかしい<sup>5)</sup>。(8)の“挨了饿”は「空腹に耐えた」というよりも、飼い主から食べ物を与えられず、「空腹を強いられた」ことを表す。そしてこの含意が“含恨地睨视”につながっていく。従って、“挨A”においても、“挨”の本来の「食らう」という意味が残っている。「“饿”を食らう」とは、「何らかの原因で不本意に、“饿”の状態を経験するはめになる」と解釈できる。

“挨N”、“挨V”、“挨A”はそれぞれ構文が異なるものの、“挨”からは「動作行為や影響を食らう」という共通の意味が読み取れる<sup>6)</sup>。この中で、“被”受身文への置き換えが可能となるのは、“挨V”の場合のみである。本稿では“被”受身文との類似点の多い③の場合の“挨”構文を考察対象とする。以下、特に断らない限り、本稿でいう“挨”構文はすべて動詞を目的語とするタイプの構文を指す。

### 3. “挨V”の意味機能

#### 3.1 「何をサレタか」の“挨V”

“\* 挨打哭”の不成立や、“挨打”の未然形の成立からは、“挨”構文が「対象がどうナッタか」を語るための表現ではないことがわかる。木村1992:12では“被”受身文について、「対象が何をサレタかということよりも対象がどうナッタかということの方に、より大きな関心が寄せられる表現である」と特徴づけている。ならば、対象の状態変化を描くことの

できない“挨”構文の機能はまさにこの記述を逆にしたものではないか。すなわち、“挨”構文は「対象がどうナツカではなく、どんな仕打ちを受け、何をサレタか」に焦点を置く表現と考えられる<sup>7)</sup>。

「どうナツカ」が他者の働きかけによる「変化、結果」を述べるのに対し、本稿でいう「何をサレタか」は、人間が他者の働きかけを受け、それを実感し、体験する過程で感じる何らかの負の影響を語るものである。“野比挨打了”の場合、のび太が他者の殴りを食らった（経験した）ことを語ることを通して、身体的、精神的なダメージといった負の影響が含意されている。“被”受身文を「変化と結果」の文とよぶならば、「何をサレタ（サレル）か」ということを語る“挨V”の文は「体験」の文といえる。ここでの「体験」とは、Vが表す出来事（サレタこと）のみならず、“挨”自体の意味、つまり主語に立つ人間がそれを「食らった」ことも意味の中に含まれる。負の影響がこの“挨”に現れている。次の例の太字の部分からは、“挨打”という体験が主人公に与えた心理的影響を読み取ることができる。

- (9) 整整跑了半夜，我才将《我的前半生》追回，我也因此挨了父亲的打。很重。那是十分惊恐的一夜。我是因为挨打之后，再一次深深地体会到那种默默无言的父爱的。(CCL) (私もそれゆえ父親に殴られて、重い体罰を受けた。それは実に恐ろしい夜だった。殴られた後に、父のその黙々とした素朴な愛情を再度深く感じたのだった。)

一方、“野比被打了”の場合、「殴られたことが原因で、様子や状態に変化が生じた」ことを表す。“挨V”の文では出来事、及び「食らった(“挨”）」の意味に焦点を置くのに対し、“被”受身文では結果の部分が焦点になりやすい。

- (10) 志刚还没站稳当，就被一脚踹倒了，i他他没哭，他被打愣了。志恒提起志刚，左右开弓，“叭叭”的耳刮子打在志刚脸上，边打，

辺呵斥：“我让你不好好念书，让你不好好念书。” ii 志刚终于被打哭了。（《人生如梦：我的忏悔》）i 彼は泣かなかったが、固まってしまった。ii ついに泣き出した。）

(10) は志剛が兄の志恒に殴られて様子がどう変化したかを追いかけた場面である。i、ii の“被”受身文が表しているのは「殴られた」という体験よりも、むしろ「殴られている中で、徐々に泣き出してしまった」という様子の変化である。i、ii を次のような形容詞述語文に置き換えても、文脈の面での不自然さは感じられない。

(10') 志刚还没站稳当，就被一脚踹倒了，i' 他没哭，他愣了。志恒提起志刚，左右开弓，“叭叭”的耳刮子打在志刚脸上，边打，边呵斥：“我让你不好好念书，让你不好好念书。” ii' 志刚终于哭了。

こうした違いに注目すると、意味機能の異なる (3) の a と b ではそれぞれの用いられる文脈が異なることがわかる。例えば、「のび太は今日学校でどうだった」という質問に対しては a が適切であり、一方「のび太が殴られて、歩けなくなった」という場合は b を用いた“野比被打了，走不了路了”が自然である。「何をサレタか」を語る“挨V”は人の体験や境遇を述べる文脈に現れることが多い。(11) の“挨打”の含意から「祖父が若い頃弟子として苦労した」ことが読み取れる。体験や境遇を語る場面では“被”構文が現れにくい。

(11) 初当学徒时，祖父经常挨打。(CCL)

(弟子入りしたばかりのとき、祖父はよく殴られていた。)

(11') ? 初当学徒时，祖父经常被打。

### 3.2 “挨V”が表す体験

ここで“挨V”が表す「体験」の概念について確認したい。通常、意味役割としての経験者 (experiencer) とは patient、theme に対し、「～が

見える」、「～が聞こえる」という場合の主語を指す。「見える（“看见”）」、「聞こえる（“听见”）」は他者による直接的な働きかけが関与しない「自ら」の体験であるのに対し、“挨V”は他者の働きかけが関与する体験を表す。本論は、“挨V”の体験を通常の体験の一種としてとらえる。働きかけが関与する体験を動作主の角度から能動文の形で述べるのではなく、あえて体験者（＝働きかけの対象）の観点から受身表現によって述べるのは「負の影響」が含意されているためである。例えば、“考试没考好，野比挨打了”（テストの点数が悪かったので、のび太は殴られた）において、のび太の様子の変化を知ることにはできないものの、「のび太は体罰、しつけを受けた」といった影響を読み取ることができる。次の例の“挨骂”は要するに「責任を問われる」ことを含意している。

(12) 这种事如果被先生知道了，我会挨骂。（CCL）（こういうことをもし旦那様に知られたら、私はきっと叱られるに違いない。）

文成分によって直接明示されていないものの、体験者が影響を被ったことを読み取ることができる表現として、日本語の間接受身文が挙げられる。「太郎が財布を盗まれた」や「太郎は花子に泣かれた」における太郎はのび太と同様に「迷惑」を被っている。迷惑を感じるのは人間であるので、通常このような表現において無生物が主語になることはできない。“被打了”は人以外に身体部位を主語に取り、その状態変化を述べるのに対し、“挨V”は身体部位などの無生物を主語にすることができない。

(13) a 肩上和头部都被打了。（CCL）（肩と頭も殴られた。）

b ?肩上和头部都挨打了。

(13) bと同じ理由で不成立となるのが、吕云生 2010:52 で指摘されている“\*他挨了杀”（彼は殺された）の例である。殺害の場合、「彼」はもはやそれを体験し、迷惑がることができない。興味深いことに、ほぼ同じような状況だが、「ナイフで刺され、死に至っていない」場合は“挨捅”



で表現することができる。

- (14) 又有人挨搥 重伤入院。(http://newstarnet.com) (また人が刺されて、重傷で入院。)

### 3.3 未然の“挨V”

影響含意型の動詞からなる受身文が既然の事態に限られる点はすでに木村 1992:11 で指摘されており、「影響の含意は、動作の完了が積極的にマークされた形においてこそ可能になる」と述べている。これを踏まえ、本稿では“被打”と“挨打”がそれぞれ未然の助動詞と共起するか否かについて調査を行った。CCLの検索結果では、未然の“会被打”は全く検出されなかったのに対し、未然の“会挨打”は33例見られた。既然を表す“挨打了”は21例であるので、“挨打”は逆に既然よりも未然の事態を表しやすいことがわかる。また、“会挨打”以外に“得挨打”、“要挨打”なども多数見られるが、“被”受身文では“要被打”の1例のみが検出され、“被打”は助動詞“得”、“要”と共起しにくいことがわかる。この結果は木村氏の指摘を裏付けるものである。“被打”は結果意を出すために既然の事態に限られているのならば、既然に縛られない“挨打”はやはり結果や変化ではなく、体験の方に焦点を置いているといえる<sup>8)</sup>。

## 4. “挨V”が表す事態

### 4.1 「負の影響」の含意力

“挨”構文と“被”受身文は、受身の事態をいかにとらえ、伝えるかという点において異なることがわかった。次は“?挨推”（押される）がなぜ成立しにくいのかという問題を取り上げ、“挨V”構文の範囲と成立条件について考えてみたい。

日本語は「殴る－殴られる」、「押す－押される」のように、受身形が

生産的に作られるのに対し、中国語は“挨打”、“挨骂”が成立する一方で、“?挨推”が容認されにくい。例えば、満員電車で降りる人に後ろから押されたという状況を表すのに、“一个要下车的人推我”は自然な文であるが、“?我挨一个要下车的人推”は不自然である。

「後ろの人に押される」という出来事は「殴られる」と同様「負の影響」を含意する体験といえよう。これは日本語ではどちらの体験も「ラレル」表現を用いる点から見て取れる。にもかかわらず、“?挨推”が不成立なのは、「ラレル」形や迷惑受身文に比べ、“挨V”は構文として「体験者が負の影響を被る」ことを含意する力が弱いためと考えられる。構文自体の含意力が弱いため、“挨V”ではVが一定の危害を意味する動作行為でなければならない。次節でみるように、危害の意味が強い“打”、“骂”などからなる“挨V”は熟語化し、しばしば「体罰」、「叱責」を意味するイディオムとして用いられる。これに対し、“挨捅”のように用例が少なく、字義通りの意味しかもたない新しく作り出されたものもある。“挨打”、“挨骂”はイディオム的な意味をもつため「負の影響」が明白であるのに対し、新しく作り出された表現の場合、どれだけ「負の影響」が読み取れるかによって表現の成否が決まる。“挨捅”に対し“?挨推”が成立しにくいのは、“推”は危害を加える動作と結びつきにくいためである。次節ではまず熟語化した“挨V”を取り上げ、4.3節では慣習的でない“挨V”を見ることにする。

## 4.2 イディオム化した“挨V”

### 4.2.1 バリエーションをなす“挨V”

“挨V”は望ましくない体験を表すため、Vは悪い影響や危害を及ぼす動作行為を表す。范中华 1991、王一平 1994、吕云生 2010、蔡淑美 2010で取り上げられている“挨//V”の例を整理すると、“挨”と結合するVは主に次の四つに分類できる。

(15) “挨”と結合するVの種類

- a [殴る動作] 抽打 揍
- b [殴る以外の動作] 踢 掐 挤 咬 扎 撞 淋 浇 捅
- c [非難・処罰] 罚 剋 骂 批 (评) 训 (斥) 说 整 斗
- d [詐欺] 坑 骗 涮 宰

この中には、“挨”とVとの結びつきが慣習的で、一語として辞書に登録されているものが少なくない。イディオム化した“挨V”は単独で文の述語となる以外に、心理動詞の目的語となったり、さらにそのまま名詞として用いられることもある。

(16) 你不怕挨骂,我还怕挨骂呢!(CCL)(あなたは叱られるのが平気でも、私は平気じゃないよ。)

(17) 如果你们不听话,黑会让你们知道什么是真正的挨打。(CCL)(もし言うことを聞かないなら、黒会があなたたちに本当の折檻を知らしめてあげる。)

“挨打”、“挨骂”の熟語化が見て取れる。イディオムのもう一つの特徴は、バリエーションである。J.Taylor 2012:75-80 は、一般的にイディオムにはいくつかのバリエーションが見られることについて報告している。そのバリエーションは、イディオムを構成する語彙の一部分が変わることで作られる。例えば、hit the bottle、hit the booze、hit the whisky の三つの表現では目的語の名詞が異なるものの、すべて「酔っぱらう」ことを意味するイディオムであり、互いをバリエーションとみなすことができる。これに照らし合わせると、aの動詞からなる“挨抽”、“挨打”、“挨揍”はすべて「殴られる」ことを表し、cの“挨骂”、“挨批(评)”、“挨训(斥)”、“挨说”は「叱られる」こと、dの“挨坑”、“挨骗”、“挨涮”、“挨宰”は商売などの取引で「騙されたり、お金をぼられる」ことを指す。吕云生 2010:52 では計19種の“挨V”を挙げているが、その中の多くはこうしたイディオムであり、次のような五タイプに分類できる。

(18) イディオム“挨V”のタイプ

- a 「殴られる」挨打 挨抽 挨揍
- b 「叱られる」挨骂 挨批 挨批评 挨训 挨说
- c 「ぼられる」挨宰 挨坑
- d 「騙される」挨涮 挨骗
- e 「吊し上げに遭う」挨整 挨斗

イディオムとして、aは「体罰、折檻、暴力」、bは「叱責、説教」、cとdは「詐欺」、eは「吊し上げ」の体験を指す。こうした熟語化した“挨V”は実際の動作というより、「行為のタイプ」を表す。

#### 4.2.2 行為タイプとしての意味

イディオムにはイディオム的な意味が見られる。(18)で挙げた“挨V”の全体的な特徴として、具体的な出来事を表しているというより、ある種類の体験をタイプのレベルで指示し、その体験への名づけとして用いられることが多い。例えば、体験のタイプとしての“挨打”は厳密には、日本語の「殴られる」よりも意味の抽象度が高い。「殴られる」は「殴る」の受身形として、対象側の角度から、動作者が行った具体的な動作に言及することができる。「ジャイアンはのび太を一発殴った」に対して、「のび太は一発殴られた」が問題なく成立する。この場合の「殴られた」は具体的な動作を指す。これに対し、“挨打”の場合、“胖虎打了野比一拳”に対して“\*野比挨打了一拳”と言うことができない。また、「殴られる」は「こっ酷く殴られた」、「三十分間殴られていた」のように、動作の具体的な様子や行われた時間を伝える副詞句と共に起るのに対し、“挨打”は“\*狠狠地挨打了”、“\*挨打了三十分”のような文を作れない。“挨打”は動作の具体性を高める表現と共に起しにくいことが見て取れる。“挨打”は具体的な動作に言及する代わりに、実際の文においてしばしば「体罰」、「折檻」の意味で用いられる<sup>9)</sup>。

- (19) 刘德华，也和所有男孩子的童年一样，经常犯下错事被家长批评  
甚至是挨打。（CCL）（よく悪いことをして親に怒られたり、さ  
らには殴られたりもした。）

従って、「野比挨打了」は「のび太が殴られた・のび太が体罰を受けた」の両方の解釈が可能である。行為タイプの「体罰」を表す后者では、「負の影響」の含意が明白である。このように考えると、「挨打」のイディオム的な意味は「殴られる」がもつ影響の含意から発展したものである可能性が大きい。(18)の「挨V」に関して、「負の影響」の含意はそのイディオム的な意味によって予め保証されている。

#### 4.3 非慣習的な例からみる“挨V”の成立基盤

イディオム化した“挨V”に対し、(15) bの動詞からなる“挨踢”、“挨掐”、“挨挤”、“挨咬”、“挨扎”、“挨撞”、“挨淋”、“挨浇”、“挨捅”はCCLでの検出数が少なく、中には0例のものもある。これらは名詞になることができない。

- (20) a 我让你知道什么是挨打。（体罰とはどういうものを教えてやる。）  
b ? 我让你知道什么是挨踢。  
c ? 我让你知道什么是挨捅。

名詞になれない点は“挨打”、“挨骂”の名詞化現象と対照的である。b、cが成立しないのは、“挨踢”、“挨捅”がまだ行為の「タイプ」ではなく、あくまで個別的な動作行為を表しているからである。この場合、イディオム的な意味によって影響の意味が保証されない以上、構文を成立させるための条件として、Vが表す動作から「負の影響」が読み取れなければならない。“挨踢”、“挨捅”の用例が少ないながら確認できたのは、“踢”、“捅”は攻撃の行為として解釈されることで、「蹴られた」、「ナイフで刺された」という体験から「攻撃を受けた」という影響の含意が読み取れ

るためである。これに対し、“?他挨推了（彼が押された）”が成立しにくいのは、“推（押す）”は危害性を連想しにくいいため、“挨推”が「攻撃」などの影響を含意しにくいからである。なお、同じ「押される」でも、「押し合う」という意味の“挨挤”の例は見られる。

- (21) 到了商场才知道什么叫“人口爆炸”，尤其是节假日，宁可在家  
闷着也别进商场挨挤去。 (CCL) (たとえ家で塞ぎ込んでいても、  
わざわざ百貨店に押されに行くのは止そう。)

これは、「押し合う」ことを表す“挤”から、「混雑で身動きがとれない」という「影響（迷惑）」が読み取れるためである。“挨V”は構文によって「負の影響」を付与する力が弱いため、動詞自体の意味が表現全体の成否を決める重要な要素となる。なお、“?挨推”は迷惑の意味を帯びにくい、CCLでは“挨N推搡”の例が見つかっている。

- (22) 常委带来了一大帮名记者，那些人手脚快，机器好，脾气也大，  
抢镜头时，常常动手推人。庄大鹏拍新闻片反应比他们慢，就老  
是挨他们推搡。 (CCL) (庄大鹏はニュースを取材する時彼らよ  
り反応が遅いため、よく彼らに押される。)

“就老是挨他们推搡”から動作主（N）の“他们”を取り除き、“就老是挨推搡”のように言うことも可能であるため、“挨推”に対し“挨推搡”は成立しやすいことがわかる。“推”は一回の動作であるのに対し、“推搡”は“推推搡搡”という表現からもわかるように、人を前に突き出すという動作を何回も繰り返す行為を指す。“推”という動作は単独では攻撃を含意しにくい、“推搡”のような一連の動作になると攻撃性、危害性が増す。“挨N推搡”、“挨推搡”が成立するのは全体から「負の影響」が読み取れるためである。

一般的に“挨V”は、日本語の「ラレル」表現ほど生産的ではない。これは両者の構文の影響含意力に差があるということのほかに、受け手視点の文がどれほど必須かという点とも関係している。日本語では「言う

「言われる」、「見る－見られる」のように、受け手視点の表現が容易に作られるのに対し、中国語では変化、影響の含意を伴わない単なる受け手視点の受身文は作りにくい。「先生に何を言われたの」に対する自然な中国語は、「老师说你什么了？」という能動文であって、「？你被老师说什么了？」、「\*你挨老师说什么了？」という受身表現を用いることはできない。たとえ「自分」が行為の受け手であっても、「后面有人推我」のように自分を対象にした能動文を用いることが可能である。「\*挨推」が言えないのは、「挨」構文は単に受け手を主語に据えるための表現ではないためである。負の影響を含意せず、単に受け手を主語に据えた「\*挨看」（見られる）、「\*挨叫」（呼ばれる）、「\*挨听」（聞かれる）などは成立しない。

以上、影響含意力の観点から、「挨V」が表す体験の範囲と成立条件について論じてきたが、「挨V」の成否はまた動詞「挨」自体の語彙の意味と密接に関係している。2章でふれたように、「挨鞭子」にはすでに「挨鞭子扛」の意味があるので、「挨」の基本義は「殴る蹴るなどの身体攻撃を食らう」ことである。イディオム化していない「挨V」が表す体験では、「身体攻撃を受ける」事態が最も多い。「挨」の語彙の意味が結合動詞のタイプを決定する一要素となっている。「？挨推」以外に、身体に働きかける動作ではない「挨V」も成立しにくい。

## 5. “挨V”の拡張形式

ここまで「挨V」の文を中心に見てきたが、「挨V」はまたVの動作主を間に導入し、「挨NV」と「挨N的V」の形に拡張することができる<sup>10)</sup>。以上で論じた「挨V」（特にイディオム化したもの）の成り立ちは構文というより語彙的であるのに対し、この二つの拡張形は構文的である。「挨NV」は「挨+NV」、「挨N的V」は「挨+N的V」にそれぞれ分解できる。「挨V」に比べ、動作主が導入されている「挨NV」は形の面でさらに「被」

受身文に近づいている。“挨 V” がもつ意味機能上の特徴は“挨 NV”にも当てはまるのだろうか。そして、“挨 NV”と“挨 N 的 V”の違いはどこにあるのだろうか。例えば「のび太はジャイアンに殴られた」という日本語は、“挨 NV”、“挨 N 的 V”と“被”受身文の三通りの表現で言い表すことができる。

- (23) a 野比挨胖虎打了。  
       b 野比挨了胖虎的打。  
       c 野比被胖虎打了。

まず“挨 NV”と“被”受身文の違いから見ていきたい。“被 NV”は既然、つまり“被 NV 了”の形をもって成立するのに対し、“挨 NV”は“挨 V”以上に既然の“了”と共起する例が少ない。(23) a は作例で、文自体は成立するものの、CCL では“挨 NV 了”はほとんど見られなかった。“挨 NV”は“挨 V”と同様、未然の事態への危惧や慣習的な出来事を表すことが多い。これに加え、“挨 NV”は“被 NV”のように結果補語を伴うことができず、身体部位などの無生物を主語とすることができないため、“挨 V”と同じく「体験（何をサレタか）」を語る構文であるといえる。

- (24) a \* 野比挨胖虎打哭了。           野比被胖虎打哭了。  
       (のび太はジャイアンに殴られて泣いた。)  
       b ? 野比的头部挨胖虎打了。       野比的头部被胖虎打肿了。  
       (のび太の頭がジャイアンに殴られた。)

では、“挨 NV”が表す「体験」と動作主のない“挨 V”との違いは何か。ここで注目したいのは、“挨 NV”における N が特定の人物を指すというより、“挨 V”が表す「行為」の種類をさらに限定するために導入されたタイプとしての動作主を表すことが多い点である。例えば“挨 N 打”において、N が父母や夫妻などの親族関係を表す名詞である例が多く見られる。

- (25) 他小时候就经常挨妈妈打，也没改掉自己的毛病。(CCL) (彼は



小さい頃よく母親に殴られた。

(26) 近1%の妇女经常挨丈夫打。(CCL) (1% 近くの女性がよく夫に殴られている。)

(25) (26) の“妈妈”、“丈夫”は特定の人物を指しているわけではなく、むしろ「しつけ」と「暴力」の事態における典型的な動作主としてとらえられる。一般的に「しつけ」や「暴力」の事態では、事態に関わる動作者のタイプや対象との関係性がある程度想像できる。「しつけ」は大概父母が子どもに、「いじめやDVなどの暴力」は力が強い方が弱い方に加えるものである。“挨打”だけでは「しつけ」か「暴力」かがまだはっきりしないところに、動作主のタイプを導入することで、事態の種類がより明確になる。“挨妈妈打”は「しつけ」、「挨丈夫打」はDVを意味する。“挨NV”は行為の種類を特定することで、“挨”構文の意味機能としてなくてはならない「影響」の含意を補強しているのである。

行為の種類を特定するための手段としての“挨NV”は、イディオム化がそれほど進んでいない“挨V”の場合にも見られる。例えば、“挨扎”は文脈なしに具体的にどのような体験かを特定することができないが、“挨针扎”（針で刺される）では受けた行為（体験）が特定されると同時に、「負の影響」も想像しやすい。“挨咬”も動作主によって全く異なる体験を指す。“挨狗咬”は「犬に噛まれる」こと、“挨跳蚤咬”は「ノミに刺される」ことを意味する。ここでの“狗”、“跳蚤”もやはり特定の犬、ノミではない。また“挨针扎”の“针”はそもそも動作主ではなく、道具である。人間以外の動物、そして道具である無生物までNになることができる点を考慮すると、“挨NV”におけるNVは「NがVする」という主語と動詞の関係にあるというより、「NがするV、Nを用いたV」といった修飾関係にあると考えられる。このようにみると、“挨NV”を“挨V”の「補足版」としてその下位範疇に入れることができると同時に、“挨NのV”とのつながりも見えてくる。“挨NV”におけるNVが修飾関係にあ

る点で、“挨 N 的 V”における“N 的 V”と同じである。

“挨 NV”に比べて、“挨 N 的 V”では N の際立ち度が高い。“挨 N 的 V”は人間以外の動物や無生物主語を N の位置に置かない。また人間であっても、不特定多数の“人”も“挨 N 的 V”構文に入ることができない。この2点は“挨 NV”との顕著な違いとなる。“挨针扎”に対し、“? 挨针的扎”は成立しない。“挨人骂”は「人に批判される」ことを意味するが、“? 挨人的骂”は通常では不自然な表現となる。“挨 N 的 V”の N は“他 / 她”であることが多く、“他 / 她”は展開されている談話のトピックである。

(27) 他时常发脾气, 骂了觉新, 骂了克明; 连周氏也挨了他的骂。 (CCL)

(周夫人ですら彼に罵られた。)

“挨 N 的 V”は“挨了 N 的 V”の形で既然の事態を表すことができ、用例も“挨 NV 了”より多く見られる。これは、中国語の“N 的 V”名詞句は本来既然の事態を含意しやすいことと関連していると思われる。N の際立ち度が高い“挨 N 的 V”において、その含意する「負の影響」は動作主 N の人物像と深く関わる。従って、(23)a の“野比挨胖虎打了”に比べ、b の“野比挨了胖虎的打”には「ほかでもなく、あのジャイアンに殴られた」という含意があり、予想される影響もより深刻なものとなる。

以上から、“挨 NV”、“挨 N 的 V”と“被 NV”の相違点を次のようにまとめられる。“挨 NV”、“挨 N 的 V”は「体験 (何をサレタか)」を語る点で“挨 V”と同じであり、変化に注目する“被 NV”と対立する。“挨 NV”は“挨 V”が表す体験を特定することで「影響」の含意を手助けするのに対し、“挨 N 的 V”は N の人物像を際立たせることで「影響」を含意させようとする構文である<sup>11)</sup>。

## 6. おわりに

本稿では動詞“挨”からなる語彙的な受身表現“挨 V”構文を取り上げ、

“被”受身文との比較を通して、その意味機能及び成立基盤を中心に論じてきた。“挨V”構文と“被”受身文との共通点は、主語に立つ人間が何らかの影響を被ることを含意しなければならない点にある。両構文の違いは、どこに焦点を置き、何について語るかという機能の面にある。対象の状況や様子の変化を描写する際に用いられやすいのは“被”受身文である。一方、詳細な変化はさておき、対象の角度から、対象がどんな事態を体験したのかについて語ることで「負の影響」を伝えるのは“挨”構文である。“挨V”の種類と成立基盤の問題では、本稿は“挨V”をイディオム化した表現と非慣習的な表現との二種類に分けた。前者では影響の含意がイディオムの意味によって保証されているのに対し、後者では動詞が危害や攻撃の行為を表すことが表現を成立させる条件となる。

以上は本稿の主な考察結果であるが、“挨”構文に関して検討すべき問題がなお2点残っている。一つは、拡張形式（“挨N(的)V”）をもつ“挨V”が語彙的な単位なのか構文なのかという問題である。本稿では“挨V”がある程度生産的であること、及び動作主を導入した拡張形式をもつ点を考慮し、構文として分析を行ったが、“挨V”を考える上でそのイディオム性も重要な特徴となる。語彙か構文かという二分法的（dichotomy）な考えにとらわれない新しい視点が求められよう。二つ目は、“挨V”、“挨NV”はなぜ未然の事態への危惧や慣習的な出来事を表すのに用いられやすいかという問題である。未然への偏りがどのくらい構文自体の意味機能と関係するのかについては本稿では論じきれなかった。イディオム化した“挨V”が具体的な動作ではなく、行為タイプの「名づけ」として用いられていることとも関連していると思われるが、それを論証することはできなかった。今後はこの二つの問題について引き続き考察を行っていききたい。

## 注

- 1) 范中华 1991:317 では、“他挨批评了”という表現は「彼が叱られた後にどうなった」のかを言い表すことができず、“挨 V”が結果補語を伴うことができない点に注目し、“挨”構文の特徴を“只有作定性表述的功能，没有描写功能（定性叙述の機能のみで、描写機能がない）”としている。この記述から“挨”構文が対象の状態変化を表せないことがわかる一方で、描写機能に対しての“定性表述”とは一体どのような機能かについてはなお検討する必要がある。
- 2) 本稿では范中华 1991:317 の指摘を踏まえ、“\*挨打哭”の不成立を意味機能上の特徴と関連づけて論を展開しているが、“挨打”を一語化したイディオムとしてとらえた場合、“\*挨打哭”の不成立はむしろ形態上の制約であって、構文上の意味特徴によるものではないという見方もできる。例えば、同じく受け身の意味をもつ動詞（遭受動詞）“受”からなる“受气”（いじめられる）の場合も、“\*受气哭”のように言うことができない。“挨 V”構文は語彙的な側面と構文的な側面を兼ね備えた表現であるので、本稿では「形態上の制約」という可能性を排除しないが、“挨打”は分析可能な表現である点で（“打”は本来動詞である）、“受气”などよりも構文としてとらえやすいといえる。
- 3) “挨”と結合できる形容詞として、王一平 1994:29 では“饿”、“冻”しか取り上げていないが、CCL からは“挨累”、“挨痛”、“挨穷”などの例が検出された。
- 4) “挨”のような、行為を受ける対象側に立脚した動詞は中国語よりも日本語の方が豊富である。「もらう」以外に、「預かる」、「教わる」、「借りる」などが挙げられる。これらに直接対応する中国語の動詞は見られない。
- 5) 「ちょっと我慢してね」という場合に“您挨一下啊”が適切かどうかについて、北京、天津、瀋陽出身の三人のインフォーマントに意見を求めたところ、全員が不適切と判断した。
- 6) 動詞“挨”は受身の事態を表す以外に、「～に寄りかかる」という意味をもつ（“挨着门”）が、受身の“挨”は ai であり、「寄りかかる」の場合は ai である。
- 7) 李 2016 では、“被打”（通常の受身文）と“挨打”（遭受文）の意味機能について、日本語の「いじめられる」と「いじめに遭う」のペアと関連付けながら考察を行っている。“被打”は実際の動作、出来事について言及することが多いのに対し、“挨打”は主語が「虐げられている」という境遇を語る場合が多い。こうした違いは両者の統語的特徴及び用いられる文脈から確認される。「体験」や「境遇」を述べるための表現という観点からは、日本語の「いじめに遭う」の意

味機能を考える上でも有効である。

- 8) “会”、“得”のほか、“挨V”は“经常”、“总是”といった「頻度の高さ」を表す副詞を伴うことも多い。一方、影響含意型からなる“被V”は頻度の副詞と共起することが少ない。CCLからは“老是被骂”（1例）、“经常被骗”（3例）の計4例のみが検出された。頻繁に繰り返される出来事と未然の事態は、既然の事態に対して、実際に起きた個別的な出来事ではない点で共通している。頻度の副詞と共起しにくいことと、未然の事態を表せないこととは同一の理由による現象と思われる。
- 9) “挨打”がイディオム化し、「体罰、暴力」を意味するようになって、「殴られる」という本来の字義通りの意味が消えるわけではない。体罰や暴力に当てはまらない“挨打”の事態も十分に考える。
- 10) “挨V”はVの動作主を間に導入し、“挨N(的)V”の形に拡張できるので、辞書では“挨/V”のように離合詞として記される。離合詞のイディオム性については、相原 1985:25-52、赵金铭 1984:4-23を参照。
- 11) “挨NV”、“挨N的V”のほか、“挨N打了一顿”や“挨N打屁股”のような目的語を伴った“挨NVO”構文も見られる。“挨NV”、“挨N的V”が“挨V”の拡張形と見なせるのに対し、“挨NVO”においては“挨”がかなり文法化しているため、もはや“挨V”の拡張形としてみるができない。“挨NVO”の形は、“挨”を受身文マーカーとして使用する方言からの影響と関係する可能性があるため、ここではひとまず通常の“挨V”の文と区別しておく。

## 参考文献

- 相原茂 1985.「“亲嘴”の“嘴”は誰のもの?」,『明治大学教養論集』176:25-52頁
- 木村英樹 1992.「BEI 受身文の意味と構造」,『中国語』389:10-15頁
- 蔡淑美 2010.「特殊与格结构“V+X+的+O”的语义性质和句法构造」,『世界汉语教学』第3期:363-372頁。
- 范中华 1991.「论遭受类动词及遭受句」,『社会科学战线』第2期:311-339頁。
- 吕云生 2010.「动词的语义结构对句子结构的制约作用——“挨”字句及动词“挨”的语义结构分析」,『汉语学习』第6期:51-58頁。
- 王一平 1994.「从遭受类动词所带宾语的情况看遭受类动词的特点」,『语文研究』第4期:28-34頁。

- 赵金铭 1984.「能扩展的“动+名”格式的讨论」,『语言教学与研究』第2期:4-23页。
- John R. Taylor. 2012. *The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind*. Oxford: Oxford University Press.

### 用例出典

- 《CCL 语料库》([http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl\\_corpus/](http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/))。北京大学中国语言学研究  
中心。
- 《亦凡公益图书馆》(<http://www.shuku.net/novels/cnovel.html>)。